

特 発 性 肋 膜 炎 に 対 す る 結 核 化 学 療 法

草 間 富 美 子

信州大学戸塚内科教室 (指導 戸塚忠政教授)

受 付 昭 和 32 年 1 月 28 日

I 結 言

肺結核に対する最近の化学療法の効果は万人の認める
ところであるが、結核性肋膜炎に結核化学療法を行つた
場合、その臨床症状に及ぼす治療効果に関しては、Klee³⁾、Leitner⁴⁾、Hug、Moeschlin、Tanner⁵⁾、Malluche⁶⁾、Korb⁷⁾、Stadler⁸⁾、Deist⁹⁾、Kaufmann¹⁰⁾、Mackay-Dick、Rothnie¹¹⁾、五味¹²⁾らの諸報告に接するが、治療効果の有無は種々であり、現在なお確定されていない。私は特発性肋膜炎に化学療法を行つと、以後の経過においてしばしば発生する後発結核症の発病率を著明に低下せしめることを先に¹⁾²⁾報告したが、今回は特発性肋膜炎に対する化学療法の効果の有無を明らかにするために、化学療法を行つた特発性肋膜炎患者と、化学療法を行わなかつた対照群とを比較して、臨床症状に及ぼす化学療法の効果を観察したのでここにその成績を報告する。

II 検 査 方 法

患者は当教室に入院した特発性肋膜炎患者で、肋膜炎発病当初から結核化学療法を行つた12例の化学療法群と、化学療法を行わずに経過を観察した18例の対照群とを比較した。肋膜炎に引続いて後発結核症を発病したもののおよび肋膜炎発病後遅れて化学療法を開始したものは本統計から除外した。両群の経過を比較するために、有熱期間、肋膜滲出液貯溜期間、赤沈正常化までの期間、尿量増加までに要した期間、肋膜肝臓、体重、ツ反応等について比較観察した。有熱期間は詳細に記載した病歴より算定し、肋膜滲出液貯溜期間は肋膜試験穿刺ならびにレ線透視により判定した。赤沈は Westergren氏法により室温15°C~25°Cにおいて測定し、9mm以下を

正常値とした。尿量増加は1日量500cc以上増加した時をもつて尿量増加とした。肋膜肝臓は肋膜炎発病6ヵ月後のレ線写真により判定した。体重は1ヵ月毎に測定し、入院時体重と比較して2kg以上の変動をもつて増減とした。ツ反応は2000倍旧ツベルクリン液0.1ccを前膊皮内に注射し、48時間後測定し、その横径、縦径の平均値をもつて比較した。結核化学療法剤としては急性期にはストマイ、バスの併用療法を、その後はバスの単独療法またはバス、ヒドラジットの併用療法を行つた。薬剤の投与量としては急性期には12例中9例にバス8~10g、ストマイ週2gの併用療法を、他の3例には病初バス8~10g、ストマイ毎日1gの併用療法を、その後は減量してストマイ週2gの併用療法とした。ストマイ、バスの併用療法後12例中9例にはバス8~10gの単独療法を、他の3例にはバス8g、ヒドラジット週2回100mgの併用療法を行つた。

III 検 査 成 績

1) 有熱期間

有熱期間は表1、表2および表3に示す如く、化学療法群12例では1ヵ月以内3例25.5%、1~2ヵ月内6例50.0%、2~3ヵ月内3例25.0%で、平均有熱期間は49.2±6.3日である。対照群18例では1ヵ月以内6例33.4%、1~2ヵ月内8例44.4%、2~3ヵ月内3例16.7%、3~4ヵ月内1例5.5%で、平均有熱期間は45.1±6.0日である。両群ともに有熱期間は1~2ヵ月内のものが多い。両群の平均有熱期間は検定により有意の差が認められない。化学療法群12例について化学療法開始病日と有熱期間との関係を見ると表4に示す如く、両者の間には一定の関係が認められない。

表 1 対 照 群 (18例)

症 例	患 者 名	年 令 ・ 性	病 名	有 熱 期 間	肋膜滲出液貯溜期間	赤沈正常化までの期間	尿量増加の期間	肋 膜 肝 臓
1	■	52 男	右側湿性肋膜炎	54 日	69 日	385 日	24 日	高 度
2	■	22 男	左側湿性肋膜炎	14 日	45 日	41 日	20 日	中 等 度
3	■	17 男	右側湿性肋膜炎	38 日	49 日	100 日	不 明	中 等 度
4	■	18 男	右側湿性肋膜炎	77 日	30 日	145 日	23 日	高 度
5	■	24 男	左側湿性肋膜炎	39 日	65 日	141 日	16 日	高 度

症 例	患 者 名	年 令・性	病 名	有 熱 期 間	肋 膜 滲 出 液 貯 溜 期 間	赤 沈 正 常 化 までの 期 間	尿 量 増 加 の 期 間	肋 膜 肝 臓
6	■	24 女	左側湿性肋膜炎	32 日	55 日	85 日	19 日	中 等 度
7	■	35 女	左側湿性肋膜炎	52 日	36 日	73 日	28 日	軽 度
8	■	25 女	右側湿性肋膜炎	70 日	93 日	130 日	不 明	中 等 度
9	■	23 女	左側湿性肋膜炎	27 日	36 日	40 日	28 日	高 度
10	■	25 女	右側湿性肋膜炎	16 日	16 日	57 日	不 明	中 等 度
11	■	21 男	左側湿性肋膜炎	22 日	9 日	60 日	不 明	軽 度
12	■	51 男	右側湿性肋膜炎	45 日	10 日	108 日	不 明	な し
13	■	20 男	右側湿性肋膜炎	39 日	31 日	25 日	27 日	軽 度
14	■	30 男	右側湿性肋膜炎	21 日	40 日	60 日	32 日	中 等 度
15	■	20 女	右側湿性肋膜炎	55 日	45 日	178 日	26 日	中 等 度
16	■	40 男	右側湿性肋膜炎	26 日	42 日	56 日	39 日	軽 度
17	■	34 男	右側湿性肋膜炎	66 日	78 日	198 日	不 明	高 度
18	■	22 男	右側湿性肋膜炎	119 日	102 日	233 日	34 日	中 等 度

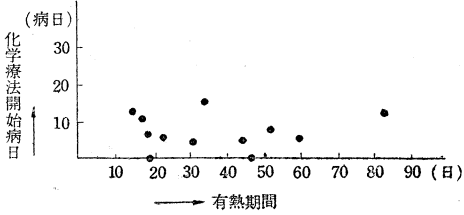
表 2 化学療法群 (12例)

症 例	患 者 名	年 令・性	病 名	有 熱 期 間	肋 膜 滲 出 液 貯 溜 期 間	赤 沈 正 常 化 までの 期 間	尿 量 増 加 の 期 間	肋 膜 肝 臓	結 核 化 学 療 法
1	■	24 女	左側湿性肋膜炎	79 日	29 日	94 日	不 明	軽 度	PAS毎日8g S M 週 2g→PAS毎日8g
2	■	20 男	左側湿性肋膜炎	90 日	122 日	128 日	不 明	軽 度	PAS毎日10g S M 週 2g→PAS毎日10g
3	■	26 男	左側湿性肋膜炎	25 日	37 日	58 日	15 日	中等度	PAS毎日10g→PAS毎日10g S M毎日1g S M 週 2g 毎日10g
4	■	20 女	左側湿性肋膜炎	81 日	31 日	78 日	23 日	高 度	PAS毎日8g→PAS毎日8g S M毎日1g S M 週 2g 毎日8g
5	■	26 男	左側湿性肋膜炎	54 日	22 日	86 日	14 日	高 度	PAS毎日8g→PAS毎日8g S M毎日1g S M 週 2g 毎日8g
6	■	25 男	右側湿性肋膜炎	39 日	76 日	145 日	不 明	軽 度	PAS毎日8g S M 週 2g→PAS毎日8g
7	■	20 男	左側湿性肋膜炎	52 日	54 日	59 日	不 明	中等度	PAS毎日8g→PAS毎日8g S M 週 2g PAS毎日8g
8	■	26 男	右側湿性肋膜炎	34 日	29 日	47 日	25 日	軽 度	PAS毎日8g→PAS毎日8g S M 週 2g PAS毎日8g
9	■	28 男	右側湿性肋膜炎	35 日	96 日	140 日	19 日	中等度	PAS毎日8g→PAS毎日8g S M 週 2g INAH 週 100mg 2回
10	■	30 男	左側湿性肋膜炎	28 日	43 日	60 日	26 日	軽 度	PAS毎日8g→PAS毎日8g S M 週 2g INAH 週 100mg 2回
11	■	21 男	左側湿性肋膜炎	47 日	32 日	16 日	不 明	中等度	PAS毎日8g→PAS毎日8g S M 週 2g INAH 週 100mg 2回
12	■	23 女	右側湿性肋膜炎	26 日	14 日	238 日	14 日	軽 度	PAS毎日8g S M 週 2g→PAS毎日8g

表 3 有熱期間

月	0～1	1～2	2～3	3～4	4～5	平均(日)
群別						
化学療法群 (12例)	3 (25.5%)	6 (50.0%)	3 (25.0%)	0	0	49.2±6.3
対 照 群 (18例)	6 (33.4%)	8 (44.4%)	3 (16.7%)	1 (5.5%)	0	45.1±6.0

表 4



2) 肋膜滲出液貯溜期間

まず両群について肋膜滲出液貯溜量および肋膜穿刺液総量を比較してみると、表5に示す如く、肋膜滲出液貯溜量（レ線写真にて肋膜滲出液が第二肋骨以上に貯溜せるものおよび縦隔竇の圧迫症状を起したものは大量貯溜、第二肋骨以下第四肋骨までのものは中等量貯溜、それ以下のものは少量貯溜とした）は化学療法群12例中大量2例16.7%、中等量9例75.0%、少量1例8.3%で、対照群18例中大量3例16.7%、中等量13例72.2%、少量2例11.1%で、両群の間にはほとんど差が認められない。肋膜穿刺液総量は表6に示す如く、化学療法群12例では大量（700cc以上）6例50.0%、中等量（100～700cc）3例25.0%、少量（100cc以下）3例25.0%で、対照群18例では大量7例38.9%、中等量5例27.8%、少量6例33.4%で、両群の間には大した差が認められない。両群について肋膜滲出液貯溜期間を比較してみると、表1、表2および表7に示す如く、化学療法群12例では1ヵ月以内4例33.4%、1～2ヵ月内5例41.7%、2～3ヵ月内、3～4ヵ月内、4～5ヵ月内はそれぞれ1例8.3%で、肋膜滲出液の平均貯溜期間は48.7±9.0日である。対照群18例では1ヵ月以内4例22.2%、1～2ヵ月内9例50.0%、2～3ヵ月内3例16.7%、3～4ヵ月内2例11.1%で、肋膜滲出液の平均貯溜期間は47.1±5.9日である。両群ともに肋膜滲出液貯溜期間は1～2ヵ月内のものが多い。両群の肋膜滲出液平均貯溜期間は検定により有意の差が認められない。化学療法群12例について化学療法開始病日と肋膜滲出液貯溜期間との関係を見ると、表8に示す如く、両者の間には一定の関係が認められない。

表 5 肋膜滲出液貯溜量

群別	肋膜滲出液貯溜量	大 量	中 等 量	少 量	計
化学療法群		2 (16.7%)	9 (75.0%)	1 (8.3%)	12
対 照 群		3 (16.7%)	13 (72.2%)	2 (11.1%)	18

表 9 赤沈正常化までの期間

群別	月	0 ～ 1	1 ～ 2	2 ～ 3	3 ～ 4	4 ～ 5	5 ～ 6	6 ～	平均 (日)
化学療法群 (12 例)		1 (8.3%)	4 (33.4%)	2 (16.7%)	1 (8.3%)	3 (25.0%)	0	1 (8.3%)	95.8±16.4
対 照 群 (18 例)		1 (5.5%)	6 (33.4%)	2 (11.1%)	2 (11.1%)	3 (16.7%)	1 (5.5%)	5 (16.7%)	117.5±20.4

4) 尿量増加までの期間

尿量を測定したものは化学療法群12例中7例、対照群18例中12例である。両群について尿量が増加するまでに要した期間を比較すると表1、表2および表10に示す如く、化学療法群では1/2ヵ月以内3例42.8%、1/2～1ヵ月内4例57.2%で、尿量が増加するまでに要した平均

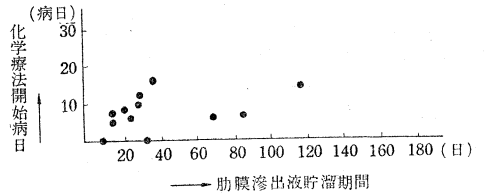
表 6 肋膜穿刺液総量

群別	肋膜穿刺液総量	大 量 (700cc 以上)	中 等 量 (100～ 700cc)	少 量 (100cc 以下)	計
化学療法群		6 (50.0%)	3 (25.0%)	3 (25.0%)	12
対 照 群		7 (38.9%)	5 (27.8%)	6 (33.4%)	18

表 7 肋膜滲出液貯溜期間

群別	月	0 ～ 1	1 ～ 2	2 ～ 3	3 ～ 4	4 ～ 5	平均 (日)
化学療法群 (12例)		4 (33.4%)	5 (41.7%)	1 (8.3%)	1 (8.3%)	1 (8.3%)	48.7±9.0
対 照 群 (18例)		4 (22.2%)	9 (50.0%)	3 (16.7%)	2 (11.1%)	0	47.1±5.9

表 8



3) 赤沈正常化までの期間

赤沈正常化までの期間は表1、表2および表9に示す如く、化学療法群12例では1ヵ月以内1例8.3%、1～2ヵ月内4例33.4%、2～3ヵ月内2例16.7%、3～4ヵ月内1例8.3%、4～5ヵ月内3例25.0%、6ヵ月以上1例8.3%で、赤沈正常化までの期間の平均は95.8±16.4日である。対照群18例では1ヵ月以内1例5.5%、1～2ヵ月内6例33.4%、2～3ヵ月内2例11.1%、3～4ヵ月内2例11.1%、4～5ヵ月内3例16.7%、5～6ヵ月内1例5.5%、6ヵ月以上3例16.7%で、赤沈正常化までの期間の平均は117.5±20.4日である。両群の赤沈正常化までの期間は検定により有意の差が認められない。

日数は19.4±1.8日である。対照群では1/2～1ヵ月内9例75.0%、1～2ヵ月内3例25.0%で、尿量が増加するまでに要した平均日数は26.3±1.8日である。化学療法群は対照群に比して尿量増加までの期間がやや短い。両群の平均日数は検定により有意の差が認められない。

表10 尿量増加までの期間

群別	月	0~1/2	1/2~1	1~2	2~3	平均(日)
化学療法群 (7例)		3 (42.8%)	4 (57.2%)	0	0	19.4±1.8
対 照 群 (12例)		0	9 (75.0%)	3 (25.0%)	0	26.3±1.8

5) 肋膜肝臓

肋膜肝臓は表1, 表2および表11に示す如く, 化学療法群12例では軽度6例50.0%, 中等度4例33.3%, 高度2例16.7%で, 対照群18例では軽度5例27.8%, 中等度8例44.5%, 高度5例27.8%である。化学療法群は対照群に比し肋膜肝臓の中等度および高度のものがやや少なく, 軽度のものがやや多い。

表11 肋膜肝臓

群別	肋膜肝臓 の程度	軽 度	中 等 度	高 度	計
化学療法群		6 (50.0%)	4 (33.3%)	2 (16.7%)	12
対 照 群		5 (27.8%)	8 (44.5%)	5 (27.8%)	18

6) 体重

入院1ヵ月, 2ヵ月, 3ヵ月後における両群の体重の

変動は表12に示す如く, 両群ともに不変例が多く, 増加例および減少例は少ない。両群の間にはほとんど差がない。

表12 体 重

群別	体重の増減	増 加	不 変	減 少	計
1 ヵ月 後	化学療法群	1 (8.3%)	9 (75.0%)	2 (16.7%)	12
	対 照 群	2 (11.1%)	14 (77.8%)	2 (11.1%)	18
2 ヵ月 後	化学療法群	1 (8.3%)	10 (83.3%)	1 (8.3%)	12
	対 照 群	2 (11.1%)	14 (77.8%)	2 (11.1%)	18
3 ヵ月 後	化学療法群	1 (8.3%)	10 (83.3%)	1 (8.3%)	12
	対 照 群	2 (11.1%)	14 (77.8%)	2 (11.1%)	18

7) ツ反応

化学療法群12例, 対照群15例に経過を追ってツ反応を検査すると, 発赤の大きさは表13に示す如く, 両群ともにツ反応は肋膜炎の病初では減弱し, その後漸次増強して31~60病日で最も強い反応を示し, 以後再びやや減弱の傾向を示している。すなわちツ反応は両群ともにほぼ同様の経過を示し, 発赤の大きさも両群の間には大した差がない。

表 13 ツ 反 応

病 日	群別	発赤の大きさ mm	0 ~ 9	10 ~ 19	20 ~ 29	30 ~ 39	40 ~ 49	計
1 ~ 15	化学療法群		4 (33.4%)	8 (66.6%)	0	0	0	12
	対 照 群		3 (33.4%)	5 (55.5%)	1 (11.1%)	0	0	9
16 ~ 30	化学療法群		1 (12.5%)	7 (87.5%)	0	0	0	8
	対 照 群		3 (25.0%)	5 (41.6%)	2 (16.7%)	2 (16.7%)	0	12
31 ~ 60	化学療法群		1 (11.1%)	5 (55.6%)	1 (11.1%)	2 (22.2%)	0	9
	対 照 群		3 (20.0%)	7 (46.6%)	3 (20.0%)	1 (6.7%)	1 (6.7%)	15
61 ~ 90	化学療法群		1 (12.5%)	7 (87.5%)	0	0	0	8
	対 照 群		3 (27.3%)	3 (27.3%)	4 (36.4%)	1 (9.1%)	0	11

IV 総括ならびに考察

有熱期間は両群ともに1~2ヵ月内のものが多く, 平均有熱期間は化学療法群49.2±6.3日, 対照群45.1±6.0日で, 両群の間には検定により有意の差が認められない。化学療法群について化学療法開始病日と有熱期間との関係をみても, 両者の間には一定の関係が認められない。Klee⁵⁾は急性型のものでは半数例に有熱期間の短縮がみられたと言い, Mackay-Dick, Rothnie¹¹⁾は有熱期間が対照群に比し短いと述べ, Stadler⁹⁾も発病早期から化学療法を行つたものでは有熱期間が短く, 化学療法は発熱に対して有効的に働くと報告している。しかし一方Deist⁹⁾

は発熱に対しては確かな影響は認められないとし, Kaufmann¹⁰⁾も同様の見解を発表している。五味¹²⁾もまた発熱に著効があるとは断言できないが, 一旦解熱後は平熱を持続すると述べている。上述の如き私の成績よりみれば化学療法は特発性肋膜炎の発熱には著しい影響を及ぼさないものと思われる。肋膜滲出液の貯溜期間は両群ともに1~2ヵ月内のものが多く, 肋膜滲出液の平均貯溜期間は化学療法群48.7±9.0日, 対照群47.1±5.9日で, 両群の間には検定により有意の差が認められない。化学療法群について化学療法開始病日と肋膜滲出液貯溜期間との関係をみても, 両者の間には一定の関係が認められない。Mackay-Dick, Rothnie¹¹⁾は化学療法群では肋膜滲出

液が対照群に比し早期に消失したと言ひ、Klee³⁾も急性型のものでは滲出液の消失が早いと述べ、Malluche⁶⁾、Leitner⁴⁾も滲出液の吸収が良好なことを報告している。その他五味¹²⁾も滲出液の吸収が速やかであるように思われると言っているが、一方 Stadler⁸⁾は肋膜炎の貯溜期間は化学療法により短縮されないとし、Korb⁷⁾、Kaufmann¹⁰⁾も同様の見解を発表している。また Stadler⁸⁾は入院後の化学療法開始時期と肋膜炎貯溜期間との間にも関係がないことを報告している。尿量が増加するまでに要する期間は化学療法群では対照群に比しやや早いものが多いが、平均日数では化学療法群 19.4 ± 1.8 日、対照群 26.3 ± 1.8 日で両群の間には検定により有意の差が認められない。上述の如き肋膜炎貯溜期間、尿量が増加するまでに要する期間等の成績よりみると化学療法は特発性肋膜炎の滲出液吸収を特に促進するような傾向は認められない。肋膜炎の赤沈に及ぼす化学療法の影響に関しては Klee³⁾は急性型のものでは赤沈が早く正常に回復すると言っているが、私の観察した化学療法群12例、対照群18例の成績では赤沈正常化までの期間の平均は化学療法群 95.8 ± 16.4 日、対照群 117.5 ± 20.4 日で、両群の間には検定により有意の差が認められなかった。肋膜炎に及ぼす化学療法の影響に関しては、Leitner⁴⁾は化学療法開始が早期の場合には肋膜炎貯溜液が早期に吸収され、レ線学的にも癒着が証明されないと述べているが、これに反し Deist⁹⁾は癒着に及ぼす影響は認められず、Stadler⁸⁾も何ら効果のないことを報告している。私の観察した化学療法群12例、対照群18例の成績では化学療法群が対照群に比し肋膜炎軽度のものがやや多かった。ツ反応は両群ともに肋膜炎の病初では減弱し、その後漸次増強して31～60日目で最も強い反応を示し、再びまたやや減弱の傾向を示していた。ツ反応発赤の大きさは両群の間には大した差が認められなかった。石川¹³⁾は肋膜炎発病時ツ反応は弱くないし陰転し、後1～2ヵ月後増強し、3～5ヵ月でさらに安定した陽性反応を示すと言っているが、私の成績もほぼ一致したツ反応の経過を示していた。抗結核剤がツベルクリンアレルギーに及ぼす影響に関する報告は数多く、Feldmann¹⁴⁾、Steenken¹⁵⁾、Wetterwald¹⁶⁾らは結核患者あるいは結核動物のツベルクリンアレルギーはストマイ治療により減弱すると言ひ、Woodruff¹⁷⁾、小山¹⁸⁾らは逆に増強するとし、Wessing¹⁹⁾、Allison²⁰⁾、Canada²¹⁾、Dermott²²⁾ら是不変であると述べている。パス治療によつても Wetterwald¹⁶⁾は不定であるとし、Wessing¹⁹⁾は不変であると述べている。また Heuwell²³⁾、Steenken²⁴⁾らはヒドラジット治療によりツベルクリンアレルギーは減弱すると言っているが、Crip²⁵⁾は逆に減弱しないと報告している。以上の如く、パス、ストマイ、ヒドラジット等の抗結核剤が結核患者あるいは結核動物のツベ

ルクリンアレルギーに及ぼす影響は種々であり一定してはいない。私がストマイ、パス、ヒドラジット等の抗結核剤を投与した特発性肋膜炎患者12例のツ反応発赤の大きさは対照群との間に大した差が認められず、両群ともにほぼ同一の反応経過を示していたことから特発性肋膜炎のツベルクリンアレルギーの推移は化学療法によつてほとんど影響を受けないものと思われる。結核初感染に続いて結核アレルギーが品進した時期に、肋膜炎に結核菌またはその産物が侵入して発病すると思われる特発性肋膜炎に、発病早期から結核化学療法を行つた場合、臨床経過に特に好影響を及ぼすということは認められなかったが、先に¹⁾²⁾報告した如く、肋膜炎後にしばしば発生してくる後発結核症の発病率を著しく低下せしめることは明らかであり、Emerson²⁶⁾も化学療法群では結核発病者が少ないことを報告している。肋膜炎に化学療法を行う場合 Deist⁹⁾、Kaufmann¹⁰⁾、Emerson²⁶⁾らは菌の耐性出現を恐れているが、先に²⁾報告した如く、化学療法群から肋膜炎後発結核症を発病した者は極めて少なく、したがつてかかる場合の菌の耐性に関して検討する機会が少ないが、私は僅か2例について菌の耐性試験を行うことができたが、耐性は認められなかった。特発性肋膜炎の如く、肺の病巣がレントゲン上肉眼で認められないほどの Minimum の病巣に対して化学療法を行う場合には、菌の耐性出現が少ないであろうことは従来の文献で徴しても充分考えられるところである。肋膜炎発病早期から結核化学療法を行うことはたとえその臨床症状に特に好影響を与えなくても、肋膜炎後にしばしば発生してくる結核症の発病防止の上から有用なことと思われる。

V 結 語

- 1) 有熱期間は両群ともに1～2ヵ月内のものが多く、平均有熱期間は化学療法群 49.2 ± 6.3 日、対照群 45.1 ± 6.0 日で、検定により両群の間には有意の差がない。
- 2) 肋膜炎貯溜期間は両群ともに1～2ヵ月内のものが多く、肋膜炎貯溜液の平均貯溜期間は化学療法群 48.7 ± 9.0 日、対照群 47.1 ± 5.9 日で、検定により両群の間には有意の差がない。
- 3) 赤沈正常化までの期間の平均は化学療法群 95.8 ± 16.4 日、対照群 117.5 ± 20.4 日で、検定により両群の間には有意の差がない。
- 4) 尿量が増加するまでの期間は化学療法群では対照群に比しやや早いものが多いが、平均日数では化学療法群 19.4 ± 1.8 日、対照群 26.3 ± 1.8 日で、両群の間には検定により有意の差が認められない。
- 5) 肋膜炎は化学療法群では対照群に比し軽度のものがやや多い。
- 6) 両群ともに入院1ヵ月、2ヵ月、3ヵ月後の体重変動は不変例が多く、増加例および減少例は少ない。両

群の間には大した差がない。

7) ツ反応は両群ともに肋膜炎の病初では減弱し、その後漸次増強し、31~60病日で最も増強し、それ以後再びやや減弱の傾向を示し、すなわち両群ともにほぼ同様のツベルクリン反応の経過を示し、各時期における発赤の大きさは両群の間には大した差がない。

(摺筆にあたり御懇篤な御指導と御校閲を賜わった恩師戸塚忠政教授に深謝致します)

文 献

- 1) 戸塚忠政・草間富美子：診療の実際，5：102，昭29.
- 2) 草間富美子：結核，31：431，昭31.
- 3) Klee, Ph. : Chemotherapie der Tuberkulose mit den Thiosemikarbazonen Domagk G. 1950.
- 4) Leitner, St. J. : Tuberkulosearzt, 4 : 92, 1950.
- 5) Hug, R., Moeschlin, S. u. Tanner, E. : Schweiz. Med. Wschr., 79 : 353, 1949.
- 6) Malluche, H. : Klin. Wschr., 28 : 224, 1950.
- 7) Korb, G. : Med. Mschr., 3 : 564, 1949.
- 8) Stadler, L. : D. Med. Wschr., 76 : 803, 1951.
- 9) Deist, H. : D. Med. Wschr., 77 : 1155, 1952.
- 10) Kaufmann, A. : Z. Tbk., 106 : 272, 1955.
- 11) Mackay-Dick, J. & Rothnie, N.G. : Tubercle 35 : 182, 1954.
- 12) 五味二郎 他：最新医学，9：1159，昭29.
- 13) 石川憲夫：臨床内科小児科，5：437，昭25.
- 14) Feldmann, W.H., Hinschaw, H.C. & Mann, F.C. : Am. Rev. Tbc., 52 : 269, 1945.
- 15) Steenken, W. & Wolinsky, E. : Am. Rev. Tbc., 56 : 227, 1947.
- 16) Wetterwald, O. : Beit. Klin. Tbk., 105 : 301, 1951.
- 17) Woodruff, C.E., Steininger, W.J. et al. : Am. Rev. Tbc., 67 : 286, 1953.
- 18) 小山義之 他：日本医事新報，1335：920，昭25.
- 19) Wessing, L. : Beit. Klin. Tbk., 106 : 66, 1951 ~ 52.
- 20) Allison, S.J. & Nilsson, J.M.N. : Am. Rev. Tbc., 56 : 579, 1947.
- 21) Canada, R.O. : Am. Rev. Tbc., 56 : 508, 1947.
- 22) Dermott, W. MC. & Mushenheim, C. et al. : Ann. Int. Med., 27 : 769, 1947.
- 23) Hewell, B. & Suyemoto, D. : Am. Rev. Tbc., 69 : 733, 1954.
- 24) Steenken, W. & Wolinsky, E. : Am. Rev. Tbc., 65 : 365, 1952.
- 25) Crip, L.H. & Levine, M.I. : Am. Rev. Tbc., 67 : 535, 1953.
- 26) Emerson, P.A. : Quart. J. Med., 24 : 61, 1955.